

十字架の苦しみ

日本基督教団
塚口教会
〒661-0012
尼崎市南塚口町
2丁目34-3
電話 06-6429-3019

引き裂かれた体

マルコによる福音書 一五・三三―三八

沖村裕史

二五節に「イエスを十字架につけたのは、午前九時であった」と語られていました。そして、三三節には「昼の十二時になると、全地は暗くなり、それが三時まで続いた」とあります。午前九時から午後三時に至る六時間、イエスさまは、手と足を釘で十字架に打ち付けられて磔にされていました。その苦しみの姿を、多くの人々が見ていました。彼らは、「救い主なら先ず自分を救ってみろ」とイエスさまを罵り嘲りました。十字架は見せしめの刑死です。激しい痛み、苦しみ、出血の中で次第に弱って死んでいく死刑囚の姿を、多くの人々に見せるために十字架につけます。イエスさまはご自分を罵り嘲る人々の目の前で、六時間にわたる十字架の苦しみを受けなければなりません。それは正視に耐えない残酷な光景です。

うことが分かるはずで。

イエスさまが殺されたとき、誰もが、イエスさまは死んだ、そう思ったに違いありません。十字架が救いだなどとは思わなかったはずで、十字架が死だけであつたとすれば、イエスさまは取り去られただけで、この世は闇として残ります。そのとき、イエスさまに望みを置いていた人がまだ何人かはいたとしても、そのイエスさまが死んだとすれば、この世には闇しか残りません。神がいなくなつてしまつたら、世界はどうなるか。神がおられなければ、この世は闇、そのことをわたしたちは知っています。戯れにも、神はいないなどとは言えません。イエスさまの死は、神がいなくなつたといふこと。そういう世界、神のない世界が全地に襲いかかつてきたのだと言います。そこには、死しかありません。死の支配、暗黒の支配が覆いかぶさつてきたのです。イエスさまが、そこまでの惨めさを味わわれたのだ、と言われることがあります。それは、感傷的な意味での惨めさではなく、本当の意味で、人間として耐え難い惨めさ、敗北を味わわれたということ、死を味わわれたということ。しかし、この日、人々が経験した、救い主がいなくなつた世界の闇というのは、信じる者のみを知る、まことの恐ろしさです。わたしたちはまず、そのことに目を留めなければなりません。その闇の中で、神殿の幕が真つ二つに切り裂かれました。神殿の幕が真つ二つに裂かれたことは、神に捨てられたイエスこそが神のみ子であつたこと、その神のみ子イエスの十字架によつてこそ、わたしたちに

救いをもたらされたのだ、ということを示すものです。

創世記一五章に、主なる神が、アブラムことアブラムと、契約を結ばれた時の様子が記されています。何頭かの動物たちが真つ二つに切り裂かれ、向かい合せて置かれます。契約を結ぶ儀式は、契約の当事者たちがその引き裂かれた動物たちの間を通るといふ仕方で行われました。それは、もしここで立てる契約、つまり約束を自分が破るようなことがあつたら、自分もこの動物たちのように真つ二つに引き裂かれてもよい、と宣言することです。そのように自分に呪いをかける行為によつて、契約が結ばれるのです。契約を結ぶといふことは、自分をその契約に縛られた者とするものであり、破つたならば死をもつて償わなければならないという呪いを引き受ける、といふことです。主なる神はここで、アブラムとそのような契約を結ばれました。日が沈み、暗闇に覆われたころ、煙を吐く炉と燃える松明が、引き裂かれた動物の間を通り過ぎます。「煙を吐く炉と燃える松明」は神を象徴しています。神ご自身が、引き裂かれた動物たちの間を通つて、アブラムと契約を結んでくださいました。大切なことは、神が契約を結んでくださった、ということ。もしこの約束を破つたら、自分も引き裂かれてよい、いのちをかけてこの約束を守る、と神が宣言してくださいました。それが、アブラムと神との契約です。それまでも、祝福の約束の言葉が与えられていました。しかし神は、新たに契約を結ぶことで、ご自身をこの約束に縛られた者となられました。破つたなら、死の呪いを引き受けると宣言してくださいました。そこに記される、「アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた」という神の言葉によつて、神とアブラムの間に、正しい、正常な関係が打ち立てられたことが

示されます。それは、人間の側に注目するなら、自らの物差しを捨てて、神のみ言葉を信じることです。そこで大切なことは、そのわたしたちの信仰は、神がわたしたちと契約を結んでくださる、という恵みに支えられているという事実です。この契約の締結において、引き裂かれた動物の間を通つたのは神だけです。アブラムはそこを通つていません。つまりこの契約は、一方的なものです。神は、ご自身をこの約束に縛られる者となつてくださった。契約を守る義務を負ってくださいました。しかし、アブラムの方は、それをしていません。その後のアブラムの子孫たち、つまりイスラエルの民の歩みは、まさにこの契約のあり方の通りに進んでいきました。イスラエルの民は、繰り返し神に背き続けました。しかし、神の方はこの契約をどこまでも守り、イスラエルの民への恵みの約束を貫いてくださったのです。

そのクライマックスこそが、イエス・キリストの十字架の死です。神を信じて歩み出したのに、神との正しい正常な関係に生きることができず、神の言葉を疑い、つぶやいていく。しかし、そのわたしたちの罪のために引き裂かれたのは、わたしたちではなく、神の独り子、イエス・キリストでした。神は、ご自身を契約に縛られる者となつてくださり、わたしたちの罪のために破られた関係を回復するために、独り子イエス・キリストを遣わし、その体が十字架の上で引き裂かれることを、引き受けてくださったのでした。神殿の幕が真つ二つに切り裂かれることは、神ご自身が、神のみ子イエス・キリストが、その体を切り裂かれることでした。イエス・キリストの十字架による新しい契約が、神の契約の恵みが、今ここに始まっているのです。

(二〇一六年二月七日、
受難節前第一主日礼拝)